



茶壺 和泉流 (狂言共同社)



腰祈 大蔵流 (善竹家)



長光 大蔵流 (大蔵三兄弟)



苞山伏 和泉流 (野村万蔵家)

〔寄稿〕

狂言の新しい楽しみ方

『立合狂言会』鑑賞記

能狂言研究者 小田 幸子

『立合狂言会』京都公演(金剛能楽堂。二〇一六年一月十日)は、紋付袴姿の茂山千三郎(大蔵流)と野村万蔵(和泉流)が、トークを交えたレクチャー・デモンストレーションを行うところからはじまった。通常の狂言公演とは「風変わった開始である。二人は、この会の「世話役」という立場である。内容は、

会の趣旨説明と、実演を交えた演技の比較などで、約十五分。その後、狂言を三番上演したところで休憩となり、後半は再度二人のトークを交えて狂言二番が続き、最後に二人の挨拶と出演者全員による「附祝言」で締めくくられる。約二時間四十五分、写真撮影会まで設けた賑やかで楽しい公演だった。

続く東京公演(喜多能楽堂。一月十七日)は、同一構成のもと、異なる演目と演者を配して行われた。五番の狂言と三回のトークから成る『立合狂言会』の特色は、大蔵流・和泉流から十組のグループ(京都・東京公演あわせて)が出演することと、三十代〜四十代の若手役者が中心になっていること

小田 幸子

能狂言研究者。博士(文学)。昭和24年、東京生まれ。立教大学卒業。法政大学大学院修了。現在、日本大学芸術学部非常勤講師。主な研究テーマは、演出史と作品研究。復曲のドラマトゥルクをはじめ、講演・解説・劇評など、研究と舞台をつなぐ仕事も行っている。

にある。

狂言の会の大半は、家単位でなされる。間狂言も同様だから、異なる家同士の役者が共演したり、互いの芸を見あうなどして交流する機会は、ごく少ない。このことは、家の結束を促して高いアンサンブルを生み出し、各家の持ち味を際立たせる役割を果たしている。だが、逆に言えば、「閉じた空間」が必然的に招く固定化の危険性がつきまとう。このような状況に対して『立合狂言会』の第一目標は、狂言界の風通しを良くするこ

とにあると思う。異なる立場の役者が交流する場を設けることによつて、まずは互いの演出・演技の特色や相違を知る。それが刺激となつて芸の幅が広がり、ひいては狂言全体の活性化につながるのではないかと、この見通しなのだろう。観客に対しても、五家の狂言を見比べる新しい見方を提供できるのだ。特定の家のファンだった観客が、他家の役者に接する機会にもなるう。

「立合」は、世阿弥の伝書に出てくる言葉である。それによると、立

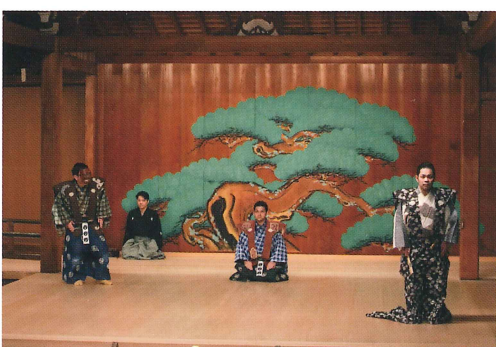
合には二種類の形式があった。ひとつは、他座の役者が交互に別曲を演じて優劣を競う形式、もうひとつは、同曲を数人で同時に舞う形式である。前者が集団対決、後者が個人対決といえようか。世阿弥は、競争相手を「敵人」「敵方」と呼んで競争意識を丸出しにしている。十家で総勢三十人が出演する『立合狂言会』でも、家同士・役者同士の競争意識はあろうし、それが舞台を活気づける役割の一端を担っていたとは思ふ。だが、わたしが一番感じたのは、出



佐渡狐 大蔵流 (山本東次郎家/善竹十郎家)



酢 薑 和泉流 (三宅狂言会)



簸 葛 和泉流 (狂言やるまい会)



棒 縛 大蔵流 (茂山千五郎家)

能楽タイムズ
平成28年3月1日号より転載



佐渡狐 和泉流（野村万蔵家）



舞の違いを見せる（東京公演）



附祝言（京都公演）



二人袴 大蔵流（茂山忠三郎家）



狂言の笑いで締めくくる（東京公演）



狂言の笑いで締めくくる（京都公演）

は、扇の差しかたからして違っていることを述べ、酒の飲み方や物の食べ方を交互に演じて、同じ狂言なのに芸風が異なる様相をほがらかに語る。目の前で比較されると、確かに表現の違いの大きさに驚ろかされる。交流を通して見出した新しい発見の嬉しさが、観客を巻き込むのだ。一九六四年生まれの千三郎と一九六五年生まれの万蔵、五十代の盛りを迎えた二人がいれば裏方にまわり（途中で三回登場してきたとはいえ）、若手に主要な場を提供する姿勢も好ましい。

役者の横のつながりを軸として狂言の多様性をアピールする『立合狂言会』は、発足二年目。おらかさとまじめさが同居している。未知数な面も課題もむろんあるだろう。とはいえ、アイデアはあっても、実現にこぎつけるのは、簡単ではなかったはずだ。その努力を多とし、さらなる工夫を重ねて、狂言の未来に寄与する運動体にもって発展することを期待して、エールを送りたい。

演者全員が協力して一日の舞台を盛り上げようと、実に楽しげに演じている姿が生み出す熱気にはかならない。異なる家の三十人の若手が結集して「祝祭」のように多彩な狂言を演じる。ここでは競争も、各家の演技の違いも、世話人の出場も、祝祭を彩る要素のひとつなのである。狂言という芸能が本来持っている開放的エネルギーが放出されていたのではないだろうか。

これまでも、芸系の異なる役者がひとつの作品で共演する「異流共演」や、各家の狂言を数番並べた催しは行われており、昨年は、「演出の様々な形」と題して、同曲の能、同曲の狂言における演出の相違を対比させた国立能楽堂の企画もあった。丁寧には調べていないのだが、これらの多くは団体によるもので、役者個人の企画ではない印象がある。『立合狂言会』は、役者である千三郎と万蔵が企画したものであって、それが舞台に反映していたに違いない。トーク・デモンストラーションの中で二人